

 書評

石坂好樹 著

自閉症とサヴァンな人たち

自閉症にみられるさまざまな現象に関する考察

融 道男

4 月に飯田市で開催された「発達障碍の理解をめぐって」のシンポジウムで N 教授とともに座長を務めた。この度本書の書評を試みて、自閉症、サヴァンについて深く窮めたい。

本書は「はじめに」において 19 年ぶりに改訂された DSM-5 について、自閉症の定義に大幅な変更が加えられたことを記している。広汎性発達障碍は消失し、「神経発達障碍」なる大項目に包摂されることになった。本書の内容は、第 1 章：江戸時代の自閉症と山下清、第 2 章：サヴァンのきらめき、第 3 章：数学的サヴァンの実例、第 4 章：自閉症の手記にみる感覚異常、第 5 章：「発達障碍」の概念と問題点、である。自閉的な人やサヴァンな人についての例が豊富に具体的に示されており、巻末の 27 頁にも及ぶ参考文献の数は膨大で貴重な情報源となろう。

本書の興味深い例の中で特に感銘を受けたのは、アインシュタインや勝海舟の父小吉、そして山下清などであった。アインシュタインはアスペルガー症候群であった。ことばの発達が遅れ、対人関係に問題があったが、数学的才能を発揮した。10 歳のときに独自の方法でピタゴラスの定理を理解していた。勝海舟の父親勝小吉は注意欠陥多動性障害 (ADHD) であったと思われる。小吉は直情径行で清廉、正義漢であったが、小さい頃より暴れん坊かつ放蕩児であった。勝小吉が 42 歳 (天保 14 年) のとき、自らの所業と家訓を内容とする、「夢酔独言」を書き置いた。山下清はサヴァンで IQ70~80、軽度の知的障害を伴うアスペルガー型自閉症などと診断されている。12 歳のときに狂暴な性格のために

養護施設八幡学園に入れられた。山下清は貼り絵によって日本のゴッホと言われ、リュックサックを背負って放浪の旅を続けた「裸の大將」として、よく知られている。

第 2 章の「8. サヴァンの神経学基盤」は、特に興味深い頁として紹介したい。自閉症とサヴァン症候群 (SS) の脳について、広汎に利用・引用された文献も併せて読むと、さらに共感が増した。SS は、1) 特異な脳機能と回路、2) 獲得し、遺伝した能力、3) 動機づけと強化の 3 条件を有する。奇才の場合は、左脳に損傷があると、その代償として右脳優位となり、非凡な記憶能力を持つ (Treffert, 1989)。前頭葉側頭葉性認知症に罹患した後に美術的才能を発揮するようになった 5 例の患者のうち 4 例は、左の側頭葉に病変を示し、右側頭葉機能が促進して描画才能を発揮したと報告されている (Miller ら, 1998, 2000)。また、健常者の左側頭部に磁気刺激を与える研究では神経活動が一過性に抑制され、11 名中 4 名の描画能力の改善が認められた (Snyder, 2003)。

わが国では 2004 年に「発達障害者支援法」が制定され、幼児期・児童期における発達障碍の早期発見・早期支援が急務になっている。DSM-5 では自閉スペクトラム障碍のうち遺伝関連が 15% となっている。今後よりいっそうの病態の解明と治療の発展を期待する。

(メンタルクリニックおぎくぼ)

●四六判 360 頁 2014 定価：本体 2,800 円＋税 星和書店刊